

AGIL図式の経験的妥当性と有効性

小林, 淳一
福岡大学

<https://doi.org/10.15017/2231600>

出版情報 : 九州人類学会報. 6, pp.17-20, 1978-12-20. Kyushu Anthropological Association
バージョン :
権利関係 :

AGIL図式の経験的妥当性と有効性

福岡大学 小林 淳 一

(1) パーソンズは、かつて社会学における体系的理論の構築の必要性を強調すると同時に、「理論」の目的について次のようなことを述べている。すなわち、理論の最終的・目的は、第一に過去の特定の事象を説明し、未来の特定の事象を予測することであり、第二に一般化された分析的知識（＝法則）を獲得することである。⁽¹⁾このように、重要な変数が全てその中に取り入れられているような完結的な（closed and complete）法則が成立している理論体系を、パーソンズは経験的理論の体系と呼び、科学的研究の最終的到達地点だとしている。⁽²⁾それでは、社会学的領域においてこのような経験的理論の体系を構築することは可能であろうか。この設問を念頭におきながら、構造機能主義とくにそのAGIL図式の論理的ないしは科学方法論上の性格を検討し、その経験的妥当性と有効性を探ってみたい。

(2) 構造機能主義とは、経験的体系としての社会にいついかなる場合にでもその程度の差こそあれ常に観察される秩序の現象を、記述し分析するのに十分な概念的・理論的道具だてを提供することを目的として、パーソンズによって提唱されている一群の立言（statements）のことである。とはいえ、周知のように、構造機能主義はパーソンズの学問的営為の各段階で幾多の変貌をとげてきている。ここではそのことを詳しく論ずることはできないが、大雑把にいつて、構造機能主義は社会構造の記述的な類型設定を中心的内容とする段階から、AGIL図式の定式化を経て、現在のところでは、「機能」を嚮導概念に据えたる有機的体系（living system）の構造と過程のダイナミックスを機能的な準拠点から分析し、更には構造そのものの機能を問うことによって社会体系の進化論的変動についての一般的な定式化⁽³⁾を目指す段階にあるといえる。

しかし、どの段階のものを取りあげるにせよ、構造機能主義はR・S・ラドナーのいう「非理論的定式化」（nontheoretic formulations）⁽⁴⁾に、またR・ブードンのいう狭い意味での理論からは区別されるものとしての「パラダイム」⁽⁵⁾に該当するものである。換言すれば、構造機能タイプの理論は、経験的理論の体系ないしは仮説＝演繹的体系には、およそ到達していないのである。このことは、構造機能タイプの理論から特定の経験的・一般化を演繹的に導出することができない、ということの意味している。⁽⁶⁾

それでは、パーソンズは構造機能主義のような非理論的式化をなぜ優先したのであろうか。その理由は、経済体系の場合に成功したその方式を踏襲して、社会体系についての経験的理論の体系を

構築しようとした V. パレートの試みに対するパーソンズの評価を見れば、よく了解しうるように思われる。パーソンズは、パレートのそのような試みを評して、一つにはあまりにも一般的かつあいまいな経験的知見としか結びつかないが故に、相対的な失敗であり、社会学的知識の現状ではかえって失うべきものが多い試みであると結論している⁽⁷⁾。パレートの試みとはその意味で対照的に、パーソンズがあえて非理論的定式化としての構造機能主義の提唱により目指したものは、既存の重要な経験的一般化とできるだけだけの接触を保ちながら、可能な限り概念図式を体系的に整備することであった。すなわち、構造機能主義の狙いは、社会学的知識の累積的發展を可能とする体系的理論の構築であったのである⁽⁸⁾。そうであるとするならば、概念図式を体系的に整備するとはどういうことか、つまり概念図式の体系化ということでは何が意味されているかを明らかにしておくことが望ましいであろう。

さて、パーソンズによれば、抽象的な範疇から成る概念図式としての理論は、その体系化の水準によって、経験的理論の体系という最終段階以前に、三つの発展段階を辿るものとされている。それらは、第一にアド・ホックな分類の体系、第二にその中でのみ個々の術語に意味が与えられる全体的な言語システムとしての範疇の体系、および第三に開放的で部分的な (open and incomplete) 法則が獲得されている理論の体系である⁽⁹⁾。極めて簡略化すれば、構造機能主義は、パターン変数図式がもっぱら中枢的役目を担っていたときには範疇の体系の段階に、AGIL 図式が主導的となってからは少なくとも部分的には理論の体系の段階にあるといえよう。そこで、体系化の水準がより高い AGIL 図式に焦点をあわせ、それが経験的一般化とどのように接触をもっているのか、すなわち AGIL 図式の経験的妥当性と有効性を明らかにしたい。

(3) AGIL 図式の経験的妥当性と有効性といっても、当然のことながら、それは特定の経験的事象を直接に説明したり予測したりすることではありえない。なぜなら、これ迄述べてきたことからわかるように、AGIL 図式は経験的理論の体系ではないからである。このことは、もう一度確認しおきたい。

AGIL 図式は、行為体系の構造分化過程に関する非経験的ではあるが一般的な水準での定式を含んでいる。そこで、この定式を一例としてとりあげ、AGIL 図式の経験的妥当性と有効性を検討してみよう。

まず、行為体系の構造分化過程 (学習・社会統制の過程) は、 $L \rightarrow I \rightarrow G \rightarrow A$ と進む位相運動過程であるとの定理⁽¹⁰⁾に従うと、行為体系たとえばパーソナリティ体系の構造分化過程すなわち社会化の過程は、 L (口唇依存期) $\rightarrow I$ (愛情依存の時期) $\rightarrow G$ (潜在期) $\rightarrow A$ (成熟期) の順序で、幼児のパーソナリティに内面化された客体体系が漸次分化してゆく過程であると考えられる。また、各位相の間の時期は、それぞれ、口唇危機 ($A \rightarrow L$)・肛門位相 ($L \rightarrow I$)・エディプス位相 (I

→G)・青年期(G→A)というパーソナリティにとっての安定または均衡に対する攪乱の時期であると想定される。⁽¹¹⁾一見して明らかなように、パーソンズによるパーソナリティの構造分化(発達)過程のこのような定式化は、極めて一般的であるために、レファレントとしている事象は明確であるにもかかわらず、その経験的妥当性を直接的に判定するのは困難である。また、このようなブードンにいわせれば「単にもっともらしいだけで」相手を「納得させる」(to convince)のではなく、「説得する」(to persuade)⁽¹²⁾タイプの立言の真偽を決定するために、それを直接経験的検証にかけるのは、その反証性の水準がかなり低いことからしても、あまり生産的ではあるまい。

それでは、このようなタイプの立言の経験的妥当性と有効性を判定するには、どのような仕方が適当であろうか。そこで、ピアジェとワロンによるエディプス位相に関する経験的に重要な発見事項、すなわち一定の水準の論理的思考はエディプス位相において始めて可能となる、を想起しよう。更に、論理的思考の基盤は対象を結合することと分離することを区別することだ、という論理学者の見解を参照しよう。⁽¹³⁾ところが、一方AGIL図式によると個別主義(particularism)の範疇に属する客体体系から普遍主義(universalism)の範疇に属する客体体系が子供のパーソナリティにおいて分化するのが、問題となっているこのエディプス位相においてである、ということが演繹的に導出されるのである。他方、普遍主義とは対象を分離する思考パターンを、また個別主義はその反対に対象を結合する思考パターンを、それぞれ定義上意味していると考えられるので、結局ピアジェとワロンの発見事項は、AGIL図式から演繹的に導出された立言と明瞭に対応することになり、⁽¹⁴⁾ここでAGIL図式の経験的妥当性と有効性が確認されることになる。⁽¹⁵⁾すなわち、この例におけるAGIL図式は、パーソナリティの発達過程に関する実証的研究が構造機能主義とは無関係に見出した事柄を自らのうちに包摂し、それらに適当な理論的位置を与え(これは、言葉のルースな意味で「説明」といってもよいかもしれない)、その分野の研究についての全体的な見通しを可能にしているといえよう。

(4) 以上の論述によって、次のことを明確にしえたものと思われる。経験的理論の体系ではない構造機能タイプの「理論」(その大部分は範疇の体系であるが、一部法則が組み込まれている概念図式)は、当の理論から演繹的に導出される立言が、それとは無関係に見いだされた経験的一般化と何らかの形で対応することを示すことによって、その経験的妥当性と有効性が始めて確定されるのである。そこで、要約的に述べるならば、このような構造機能タイプの理論すなわち「一般理論」の存在意義は、断片的なデータ・一般化・仮説・解釈の「組織化能力」(Organizing Power)⁽¹⁶⁾にあるといえよう。従って、近い将来には経験的理論の体系はもちろんのこと、理論の体系すら獲得しえない可能性が高く、更に理論的に重要な変数の規定や分類にすら大きな困難が生じ、その上理論構築過程において理論外的配慮が混入されやすい社会学的領域⁽¹⁷⁾においては、AGIL図式を中

核的要素とする構造機能タイプの理論の意義は大きいと思われる。

- (1) Parsons, T; "Essays in Sociological Theory"; 1954; pp. 214 ~ 215.
- (2) パーソンズ他(永井・作田・橋本訳)「行為の総合理論をめざして」 1951年. 83頁.
- (3) Parsons. T; "Social Systems and The Evolution of Action Theory" 1977 ;
ch. 10
- (4) ラドナー(塩原勉訳)「社会科学の哲学」 1966年 41頁
- (5) Boudon, R. ; "La Crise de la Sociologie" ; 1971 ; pp. 161 ~ 162
- (6) 構造機能主義に対する批判の一つの型に, このことを力説するものがある。G. C. ホーマンズ
が, その代表例であろう。Homans, G. C. ; "Comtemporary Theory in Sociology" in
Faris, R. & R. McNally (eds) "Handbook of Modern Sociology" ; 1964
- (7) Parsons, T. ; "Essays in Sociological Theory" ; pp. 225 ~ 226
- (8) 直井優「構造-機能分析の展開」・『思想』 1973年5月号. 32頁
- (9) パーソンズ他(永井他訳)「前掲書」 80 ~ 84頁
- (10) Parsons, Bales & Shils ; "Working Papers in Theory of Action" ; 1953 ; ch.
III & ch. V
- (11) パーソンズ・ベールズ(橋爪・溝口・高木・武藤・山村訳)「核家族と子ども社会化・上」.
1955年. 67 ~ 70頁
- (12) Boudon (translated by Vaughan, M) ; "The Uses of Structuralism" ; 1968 ; pp.
62 ~ 63
- (13) パーソンズ・ベールズ(橋爪他訳)「前掲書」 168 ~ 170頁
- (14) パーソンズ・ベールズ, 同, 171頁
- (15) 直井はパーソンズによる二大政党制の分析を例として, このことを既に指摘, 強調している。
直井「構造=機能主義による説明とそのテスト可能性」(第48回日本社会学会大会・シンポジ
ウム「現代社会学の新しい動向」第1分科会「機能主義-その限界と可能性」において提出さ
れたペーパー) 1975年. 9 ~ 11頁
- (16) Parsons ; "Essays in Sociological Theory" ; p. 354
- (17) Parsons ; *ibid.* ; p. 348

〔付記〕 本稿は, 拙稿「社会学における『一般理論』の位置とその意義」(「文化」第40巻.
第1・2号. 1976年)の一部に, 加筆, 修正してまとめ直したものである。